

Ome-Jugenddelegation 2010



第13回青梅市青少年友好親善使節団 ＜派遣の記録＞



派遣日程

平成22年8月17日(火)～8月24日(火)

○はじめに

畑中茂雄教育長を団長とする、第13回の青梅市青少年友好親善使節団16名が、8月17日から24日まで姉妹都市ポツパルト市（ドイツ）を訪問しました。団員全員が、ポツパルト市の家庭にホームステイしながら、歓迎会などを通じて市民との親睦交流を深めてきたほか、今回初めて実施したカントギムナジウムでの生徒交流、市内見学や世界遺産に指定されているケルン大聖堂の見学、ドイツの豊かな自然、歴史、文化などを幅広く見聞きし、帰国しました。

今回の使節団は、団長、市立中学校の生徒9名、市内在住の高校生4名、引率2名で構成され、青梅市やポツパルト市の概要、ドイツ語会話の勉強やドイツ語の歌、よさこいソーランの練習、カントギムナジウムで発表する課題などの事前研修に熱心に取り組み、とてもよい仲間として、まとまりのあるグループとなり、ポツパルト市を訪問しました。団員たちは、ポツパルト市での8日間を通じて、さらによいグループになり、青梅市に帰ってきた時には、みんな一回り大きくなっていったと感じました。

帰国後、事後研修の中で、団員ひとりひとりが、ポツパルト訪問の思い出や事前研修から派遣期間中までを振り返っての感想・反省などを報告するのを聞いて、その体験がとても新鮮なもので、とても有意義なものであり、若い団員が多くのことを学んだことが分りました。若い団員たちは、ポツパルトと青梅の友好の絆の強さを改めて知ったのではないのでしょうか。

今後、若い人々によって、両市の友好親善が長く引き継がれていき、このすばらしい姉妹都市交流がますます発展することを願い、団員ひとりひとりから寄せられたポツパルトでの生活や印象などの素直な感想をもとに、この報告書を作成しました。

また、今回の使節団は、「日本とドイツの教育制度の違い」を共通の学習テーマとして、事前に各自でドイツの教育制度について学習し、カントギムナジウムでの生徒交流の中で、意見交換を通して両国の教育制度の良い点、悪い点について学ぶことができました。この冊子には、「日本とドイツの教育制度の違い」についてのレポートも掲載しました。

若い団員たちの体験を多くの市民の皆様にご覧いただくことで、今後、より多くの皆様が姉妹都市交流、国際交流の輪に加わっていただければ、幸いです。

目次

1	団員名簿	1
2	派遣プログラム	2
3	派遣の記録	4
4	派遣報告文	
(1)	派遣全体を通して	6
	団長 青梅市教育長 畑 中 茂 雄	
	団員 比 嘉 友 浩	
	雙 木 萌 子	
	浅 野 光	
	田 中 歩	
	川 鍋 宏 明	
	鈴 木 美 麗	
	佐 藤 裕 樹	
	船 木 和	
	鈴 木 優 麻	
	成 宮 慶 有	
	吉 田 茉 由	
	落 合 郁 実	
	齋 藤 彩 音	
	引 率 鳥 居 智 子	
	布 田 信 好	
(2)	テーマ学習「日本とドイツの教育制度の違い」	22
5	参考資料	
(1)	平成22年度事業スケジュール	29
(2)	研修の様子	30
(3)	派遣団員募集要項	31

1 団員名簿

	氏名 (係)	所属・学校名	民泊家庭
団長	畑 中 茂 雄	青梅市教育長	ローズ家
団員	比 嘉 友 浩 サブリーダー	青梅市立第一中学校 2年	クラーゼン家
団員	雙 木 萌 子 (レク (歌))	青梅市立第二中学校 3年	ムンロ家
団員	浅 野 光 (記録)	青梅市立第三中学校 3年	リーゼンフェルト家
団員	田 中 歩 (レク (歌))	青梅市立西中学校 3年	ムンロ家
団員	川 鍋 宏 明 (レク (歌))	青梅市立第六中学校 2年	プラウツ家
団員	鈴 木 美 麗	青梅市立第七中学校 3年	ミュールンバッハ・ハンセン家
団員	佐 藤 裕 樹 (レク (歌))	青梅市立吹上中学校 3年	ベッカー家
団員	船 木 和 (レク (折紙)・記録)	青梅市立新町中学校 3年	ベンナー家
団員	鈴 木 優 麻 (記録)	青梅市立泉中学校 3年	ゴッドシャルク家
団員	成 宮 慶 有 リーダー	玉川学園高等部 12年	シュナイダー家
団員	吉 田 茉 由 (レク (ソーラン))	桐朋女子高等学校 2年	ナイザー家
団員	落 合 郁 実	錦城高等学校 1年	ミュントニッヒ家
団員	齋 藤 彩 音	都立青梅総合高等学校 2年	ザイザー家
引率	鳥 居 智 子	青梅市立第三中学校 教諭	ヴェッツェル家
引率	布 田 信 好	秘書広報課広聴・国際交流担当主査	ビルンシュトック家

2 派遣プログラム

月 日	時 間	日 程
8月17日 (火)	05:45 06:00 11:25 16:35 19:30	<ul style="list-style-type: none"> ・青梅市役所集合、出発式 ・青梅市役所出発 成田空港チェックイン ・全日空 NH209 便にて出発 以下ドイツ時間 ・フランクフルト空港到着 ・ボッパルト市到着 ベアシュ市長による歓迎の挨拶 ・民泊家庭へ引き継ぎ
8月18日 (水)	09:00 10:00 16:30	<ul style="list-style-type: none"> ・ボッパルト市主催公式歓迎式（旧庁舎） ・市内観光 ラインアレー（ライン川沿い遊歩道）、カルメリーター教会、セヴェルス教会、からし工場等 新青梅公園見学 ・昼食「フェルゼンケラー」、ワインセラー見学 ・ボッパルト市内でフリータイム ・民泊家庭お迎え
8月19日 (木)	08:30 12:30 14:00 16:30 18:00	<ul style="list-style-type: none"> ・カントギムナジウム訪問 テーマ学習発表・交流 ・昼食（ベデスタ財団） ・ハイキング マウンテンバイク公園にて休憩 ・リングルシュタイン家のマス池にて、マス釣り＆グリル ・民泊家庭お迎え
8月20日 (金)	08:38 15:18 16:37 19:00	<ul style="list-style-type: none"> ・ボッパルト駅集合 ケルンへ日帰り遠足 ・ケルン駅出発 ・ボッパルト駅到着、民泊家庭お迎え ・ボートクラブにて「友好の夕べ」

月 日	時 間	日 程
8月21日 (土)	09:45 11:00 12:15 13:15 17:54 18:08	<ul style="list-style-type: none"> ・カルメリーターエック出発、マルクスブルグ城へ ・マルクスブルグ城見学 ・昼食「ブルグシェンケ」 ・コブレンツのエーレンブライトシュタイン要塞へ出発 「ドイチェス・エック」、コブレンツ市観光、ショッピング ・列車でボツパルトへ ・ボツパルト駅到着、民泊家庭お迎え
8月22日 (日)		終日フリータイム
8月23日 (月)	09:00 10:10 11:30 13:45 16:30 20:45	<ul style="list-style-type: none"> ・KD 遊覧船に乗船 ザンクト・ゴアールハウゼンへ ・バスに乗りかえて、ローレライビジターセンターへ ・バスにてボツパルトへ ・昼食「クローネ」 ・民泊家庭お迎え ・カルメリーターエックに集合、送別式 フランクフルト空港へ出発 ・全日空 NH210 便にて出発
8月24日 (火)	15:00 18:30	<p style="text-align: center;">以下日本時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成田空港到着 青梅市役所へ ・青梅市役所到着 帰国報告式後解散

※時間については、プログラム作成時のものです。

3 派遣の記録（記録係による報告）

【8月17日（火）】

青梅市役所出発・ボッパルト到着・歓迎のあいさつ

- ・飛行機の12時間がとても長く感じました。
- ・ボッパルトに着くと、民泊家庭のみなさんが温かく迎えてくれて、不安な気持ちが不思議と消えていきました。
- ・自分の伝えたいことがうまく伝えられず、初めて言葉の壁を感じ、もどかしさと悔しさでいっぱいでした。



出発式



ベアッシュ市長から歓迎の挨拶

【8月18日（水）】

歓迎会・市内めぐり

- ・新青梅公園に行き、自分の名前を書いた多摩川の石を置いてきました。姉妹都市提携についてのお話を聞きました。友好親善使節団としての自覚がいつそう湧いてきました。



ボッパルト市役所にて、市長へドイツ語で挨拶する団員たち



新青梅公園にて

【8月19日（木）】

カントギムナジウム訪問・ハイキング

- ・カントギムナジウムで、青梅市の観光と学校生活について発表しました。たくさん練習していったので、良い発表になりました。
- ・ソーラン節の発表では、とても喜んでくれました。
- ・授業風景や校内を見学しました。日本の学校とは異なり、興味深かったです。
- ・昼食後、チェアリフトで山頂まで登りました。チェアリフトからの眺めは最高で、感動しました。
- ・ハイキング後、マス池で食べた魚の燻製とソーセイジがおいしくて、日本では食べられない味だなと思いました。



カントギムナジウムでの発表の様子



マス池にて

【8月20日（金）】

ケルンへ日帰り遠足・友好の夕べ

- ・造るのに何百年とかったケルン大聖堂は、とても迫力があり、歴史の重みを感じられました。
- ・約500段の階段を上り頂上に着きました。素晴らしい眺めでした。
- ・友好の夕べでは、和太鼓やダンスで歓迎してもらい

ました。私たちも、「ローレライ」「青梅市民の歌」「茶つみ」の歌とソーラン節を披露しました。踊り終わった後、ドイツ人の方々も一緒に踊りました。たくさん練習していったので、喜んでもらえてよかったです。



ケレン大聖堂

和太鼓で歓迎されました(友好の夕べ)



はっぴ姿でソーラン節を披露

【8月21日(土)】

マルクスブルグ城見学・コブレンツ散策

- ・昼食後に、ゴンドラに乗りながら、ライン川とモーゼル川の色が変わる景色を楽しみました。
- ・コブレンツからは列車でボツパルトへ帰りました。



エーレンブライトシュタイン要塞にて

【8月22日(日)】

フリータイム

(それぞれホストファミリーと過ごしました)

【8月23日(月)】

遊覧船乗船・「ローレライ」来訪者センター見学

・お別れ会、ボツパルト出発

- ・ローレライとライン川を上から眺めながら、ボツパルトの景色をしっかりと胸に焼きつけました。
- ・時間が経つにつれて、ボツパルトを離れなければならない時間が刻々と迫ってきて、「できることならこのまま残りたい」という思いがだんだん強まってきました。



ローレライにて

【8月24日(火)】

帰国・青梅市役所にて帰国報告

- ・飛行機を降りて通路を歩くと、蒸し器の中にも入れられたかのような湿度の高さでした。ドイツの過ごしやすさに慣れてしまっていました。
- ・青梅に着いた途端、安心感があって、「やっと青梅に帰ってきたんだな」と改めて実感しました。
- ・本当にお世話になりました。今度はドイツ語をしっかりと話せるようになってもう一度訪れたいと思いました。

4 派遣報告文

(1) 派遣事業全体を通して

ポッパルト市を訪問して

団長

青梅市教育委員会教育長

畑中 茂雄

第13回青梅市青少年友好親善使節団の団長として、13名の団員とともに、8月17日から8月23日までの1週間、姉妹都市ポッパルト市を訪問しました。今年は、青梅市とポッパルト市とが姉妹都市の提携を結んで45年目の節目の年であります。私にとっては、38年前、ポッパルト市を訪問して以来の再訪となりました。

成田空港から約11時間の飛行の後、多くのポッパルト市民の出迎えを受け、すぐに団員は民泊家庭での生活に入りました。中学生、高校生にとっては、民泊家庭での1週間は期待と不安の連続であったと思います。言葉が思うように通じなかったり、食事が日本と違ったりと戸惑うことも多かったことでしょう。その中で、団員は学校の代表、青梅の代表としての自覚を持ち、お互いに支えあいながら、友好親善の大役を果たしました。ポッパルト市で過ごした日々は、団員にとって生涯忘れることのできない貴重な経験であったと思います。

ポッパルト市長への表敬訪問では、団員ひとりひとりがドイツ語で自己紹介をしました。その後、ポッパルト市内を散策し、ポッパルトの歴史を学びました。新青梅公園では、持参した多摩川の石を置き、ひとりひとりがポッパルトに形跡を残しました。

カントギムナジウムでの発表では、学生や先生方からたくさんの質問があり、日本文化への関心の高さを感じました。10月にポッパルト市民が青梅を訪問した際、カントギムナジウムと青梅総合高校とが学校提携を結び

ました。これを機に、青梅市とポッパルト市の友好の絆がさらに強固なものになることを期待しています。

その日の午後、チェアリフトに乗り、ポッパルト市が一望できる丘へ登りました。ここからの眺めは、ライン川が大きくカーブしており、「ラインの真珠」と呼ばれているところです。また、ライン川が4つの湖のように見える場所があります。その日はとてもよい天気に恵まれ、ライン川を見おろす眺望はすばらしいものでした。

ケルンでは、大聖堂の階段約500段を全員が昇りました。また、その夜の「友好の夕べ」には、ポッパルト市長をはじめたくさんのポッパルト市民が集まりました。団員は「よさこいソーラン」を熱演し、アンコールではポッパルトの青少年も加わり、すばらしい交流の機会となりました。両市がこれまで築いてきた交流事業の歴史の重さを感じました。

コブレンツやローライにも行き、いよいよポッパルトの人々とお別れをする日が来ました。団員は1週間お世話になった民泊家庭の方々といつまでも別れを惜しみました。

これからも、ラインの大河のように、青梅市とポッパルト市との友好の絆が永遠に続きますことを祈ります。



ポッパルトの人の温かさを感じた交流

青梅市立第一中学校 2年

比嘉 友浩

ポッパルトの街並みは、日本とはまったく違い、景色を見ながらワクワクしました。

歓迎の場でニッキ君とティム君の顔を見た時は、なんだかすごく安心しました。昨年青梅で会った青少年の人達の顔を見た時は、再び会うことができたことに、ものすごく感動しました。

民泊家庭であるクラーゼン家には、日本の国旗が掛けてありました。ズーガン君とヘンリック君に、着いてすぐ、ゲームは好きかと聞かれ、ここからすぐに打ちとけることができました。

僕はドイツで、男の友達を作ること、家ではいつも家族といっしょに過ごすこと、1日1日を大切に楽しんで過ごすことを、心に思っただけで日本を飛び立ちました。この目標は達成できました。

2日目ぐらいから英語とドイツ語で話すことにも慣れてきました。毎日がとても楽しく、ライン川沿いをサイクリングをした時は、空気まで違いとても気持ち良かったです。そしていたるところでドイツと日本の違いをとて感じました。夜9時まで明るい1日、炭酸入りの水が出てくる食文化、オープンカーで普通の道を140キロ出せる法律、ごみに対する環境意識、サッカーの設備の差、ドイツ人の積極性、教会やお城、ぶどう畑のなり方まで違っていました。

友好の夕べでは、ソーラン節をとて喜んでくれて、ドイツの人ともいっしょに踊り、盛り上げて楽しかったです。ズーガン君とヘンリック君にも見せてあげたいと思いました。でも両親が家へ帰って2人に話をされていて、お父さんもお母さんも、とても喜んでもらったことは良かったです。ポッパルトの人達のダンスや太鼓もすばらしく、太鼓は青梅とポ

ッパルトの姉妹都市交流の深さを感じました。写真とチラシを見せて青梅大祭の説明をした時は、興味を持っていると感じ、日本文化の青梅大祭の大切さも感じました。

今回の交流では、受入れ経験も生かされました。ポッパルトの人達とも、自然に楽しく交流することができました。

送別式では、ロース家の人や、いろいろな人から、温かい言葉と、プレゼントをもらいました。クラーゼン家には、家族のように良くしてもらい、なんだか悲しくてたまらなくなりました。人の温かさをこんなにも感じるとは、思いませんでした。初めてのホームステイで不安でしたが、英語で努力した経験は、忘れられない思い出になりました。ドイツでの出来事が心から楽しいと思える1週間でした。クラーゼン家の人達、ロース家の人達、団長さん、先生、ドイツと青梅市役所の方々、通訳の方、使節団の人には、支えてもらい、感謝しています。とても良い姉妹都市交流ができ、帰ることができました。



ボッパルトでの体験

青梅市立第二中学校 3年

雙木 萌子

私は、ボッパルトで、本当に実りのある体験をしてきました。

特に印象に残ったことは、2つあります。

まず、1つ目は、ボッパルトの学校、カントギムナジウムに行ったことです。そこで、私たちは「青梅市の観光」と「私たちの学校生活」について、発表しました。別の学校、しかも、外国の学校で何かを発表するという事は、初めての体験だったので、とてもドキドキしました。でも、ギムナジウムの生徒さんたちが本当に興味津々に聞いてくれたので、嬉しかったです。質疑応答の時にも、何人もの生徒さんが質問してくれました。やはり、ドイツとは学校制度が違うので、ドイツにはない、制服や給食についての質問が多かったです。でも、観光についての質問がなかったのが、少し残念でした。

発表の後、授業と学校内の見学をさせてもらいました。授業では、みなさんとでも真剣に受けている姿が見られました。他の授業でも、積極的に発言をしていたりしたそうです。日本とは違い、授業が充実しているのだと思いました。日本の学校も、こんな風になってほしいと思いました。

学校内の見学では、各教室を見せてもらいました。特別に、普段生徒は入れない、校長室も見せてもらいました。明るい印象でした。職員室も見せてもらったのですが、仕切られた個人の席というものがなく、書類なども積まれていなかったのが、カフェのような雰囲気でした。あと、日本にはまだ、あまり普及していない電子黒板も3台あるということなので、うらやましいと思いました。そして、外観を見ていて思ったのですが、かなり古いものだと思います。日本では、あまり古い

建物を残しておくということをしなかったり、できなかったりするので、すごいと思いました。

もう1つ、印象に残ったことは、ドイツの環境問題に対する取り組みです。団員のホストファミリーの方にスーパーマーケットに連れて行ってもらったときに、ペットボトルを回収する機械を見ました。そこに、ある程度ペットボトルを入れると、25セントほど返ってくるそうです。話には聞いていましたが、実際に見たことはなかったので、新鮮でした。とても、良い制度だと思います。思い出してみると、道路に紙くずは落ちていたとしても、ペットボトルは落ちていなかったと思います。他にも、自転車専用の道路があったりしました。環境問題に日本よりも関心があるのだと思いました。

ドイツは日本よりも、いろいろなことが進んでいるのだと思いました。でも、同時に日本にいる時には気づかなかった日本の素晴らしさというものも、見つけることができました。他国の文化に実際に触れるということは大切なのだと思いました。



ボッパルトでの思い出

青梅市立第三中学校 3年

浅野 光

私はボッパルトに行って思い出になる経験をたくさんすることができました。毎日が充実し楽しかったので、滞在した7日間があったという間に感じました。

私はボッパルトに行く前、楽しみという思いよりも、ボッパルトの人と上手く生活できるのだろうかという不安や緊張の方が、正直強く心にありました。しかし、ボッパルトに着いた時、たくさんの方が拍手をしてあたたく迎えてくれたので、その不安や緊張をだいぶほぐすことができました。だから、ボッパルトの方々には感謝しています。

ボッパルトはとても素敵な町でした。街並みは、映画に出てきそうなくらい可愛いものでした。自然豊かな町でもあり、目の前には大きなライン川が流れていました。さらに、私が泊らせていただいた家の近くには草原が広がっていて、そこで見られる夕日は最高にきれいでした。また、ボッパルトでは白ワインが有名で、山の斜面にたくさんのぶどう畑がありました。山の斜面なので機械は使えず、手作業でぶどうを収穫するそうです。日本ではなかなかできないワインセラー見学をすることもできました。昔からずっとワインを作り続けているそうです。昔からある技術や製法は、これからも変わらずにいてくれたらいいなと思いました。

ボッパルトを少し離れたケルンという町にも行くことができました。そこで見学をしたケルン大聖堂は、かなりの迫力がありました。見た瞬間驚くような大きさと、写真におさまりきれませんでした。建物の中にはたくさんのステンドグラスがあり、とてもきれいでした。とても強く印象に残った建物でした。

私が派遣団員としてボッパルトに行って良かったなと思うことは、たくさんの人と交流

ができたことです。中でも、友好の夕べで披露したソーラン節は、ボッパルトに行く前の研修で一生懸命に練習したのでうまくでき、とても喜んでもらえました。また、アンコールで、今度はボッパルトの方も一緒に踊ってくださり、とても楽しく交流ができました。

ホストファミリーもとても良い方でした。言葉が上手く通じないこともあり大変でしたが、そんな時も頑張って会話をしようとしてくれました。フリータイムの日には、教会に行ってパイプオルガンの見学をしたり、バタフライセンターでたくさんの蝶を見ることもできました。他にも私を喜ばせてくれることをたくさんしてく下さり、とても心が温かくなりました。おかげでリラックスして過ごすことができました。

ボッパルトでは、実際に見たり聞いたりしてからこそ感じられた経験を、たくさんしました。また、ホームステイをすることで、外国の方と話をすることが楽しく思えるようになりました。ボッパルトに行ったことは、これからもずっと心に残る思い出になると思います。



ポッパルトでの1週間

青梅市立西中学校3年

田中 歩

ドイツといえば…ワイン、車、テディベア、バッハ、ベートーヴェン、ブラームス、西岸海洋性気候の国、そんな漠然としたイメージしかありませんでした。今回の派遣を通し、私の中にあった、活字だけ、イメージだけの「ドイツ・ポッパルト」が、実際に見、聞き、感じてきた、生きたものへと変わりました。

ポッパルトでのあつという間の1週間、毎日が今までにない素晴らしい経験であふれていました。

中でも強く印象に残っているのが、カントギムナジウムを訪問したことです。活気のある質疑応答は、本当にワクワクして、自分が当たり前だと思っていたことも、国が違えばそうではなく、また思いもよらないようなことが外国では当たり前のこと。今まで以上に国際交流への興味がわいてきました。

カントでの交流以外にも、たとえばお互いの国の言葉で数を数え合ったり、「となりのトトロ、トットーロ♪」と一緒に歌ったり、そんな何気ないことも楽しかったです。

もう1つ心に残っているのが、ポッパルトの街並みです。古い古い建物にライン川がとても美しく、自分もいつかここに住みたいと何度も思いました。特に感動したのが教会で、ステンドグラスやパイプオルガン、建物全体がひとつの芸術と言っても良いほどでした。日曜日に、ホストファミリーのムンロさんが特別に頼んでくださって、町のプロテスタント教会のパイプオルガンを弾くことができました。予定外のことだったのに、みどりさんが通訳をしてくださったおかげで、オルガン奏者の方の面白いお話も聞くことができました。念願のドイツ語の礼拝にも参加させてもらい、本当に嬉しかったです。

たくさんのことを経験できた今回の派遣で

すが、初めての海外、しかもホームステイなのでとても不安でした。初日は緊張していて、少し恥ずかしくて、なかなか話すことができませんでした。でも「炭酸水に驚いた」「家が広い」など、話題になることもたくさんあり、ムンロさんも本当に優しく、だんだんと打ちとけることができました。ドイツ語はほとんどわからず、英語もなかなか通じない。そんな状況の中、とにかく単語をたくさん並べたり、ジェスチャーを交えたりして、なんとかコミュニケーションをとることができました。ドイツ人、日本人の違いはあっても、心を通わすことができるんだ、と嬉しくなりました。

「またポッパルトへ来たら、私のところへおいで。いつでも歓迎してあげる。」

ムンロさんは、こう約束してくれました。ポッパルトを訪れる前、今回の派遣は1つの経験としか考えていませんでした。でも今は違います。ポッパルトで知ったこと、感じたことは、これからのスタート地点です。今回経験したことを生かし、外国語や国際交流にも関わっていこうと思います。



ボッパルトで感じたこと

青梅市立第六中学校 2年

川鍋 宏明

空港に到着した時、まだドイツに来たという実感がわきませんでした。空港の外に出た時、目の前にベンツの大きなトラックが右側通行で走って来るのを見て、「ドイツに来たんだ」と、これからの8日間に期待が高まりました。

ボッパルトに着くと、そこにはたくさんの人達がいる、拍手で迎えられた時、歓迎されているんだなと思い、安心しました。ボッパルト市長からあいさつがあり、その後ホストファミリーに会いました。とても明るく優しい家族で、英語で話しかけてくれました。聞けば、5年生から英語の授業があって、驚いたことに、14、5歳の時には話せるようになるそうです。皆と分かれて、車に乗って家に向かいました。最初は少し走れば着くだろうと思っていましたが、行けども行けども家は見えてこなくて、それどころか山道になってしまいました。その時は、家にはいつになったら着くのかと不安になり、酔ってしまいそうでした。しかし、突然視界が開けて、町が現れました。今までライン川沿いの写真しか知らなかったのも、未知の世界に来たような不思議な感じがしました。家に入ると、お母さんが出迎えてくれ、部屋に案内されました。プレゼントを持ってリビングに行くと、家族全員がそこにいました。その日は少し話をして部屋に戻ると、天窗の外はうっすらと明るくて「もう9時なのに。」と驚きました。

この家のお父さんと18歳のマティアスは消防士の仕事をしていて、木曜日の夜に月に1度の訓練があり、連れて行ってくれました。ドイツの消防の仕組みはとても面白く、自宅待機で連絡があった時だけ消防署に集まります。火事よりも交通事故がほとんどです。その日も、油圧の機具を使って車の中から人を

助ける訓練をしていました。スクラップの車を再利用しているせいか、大胆にドアをはずしたり窓から上を切りはなしたりして、すごいと思いました。気付いたら自分の息が白くて、夏なのにかなり寒いと思いました。

今回、初めてボッパルト市に行ってみて、英語に少し自信があったのに、初日は聞きとれなくてショックで、帰ったらもっと勉強しようと思いました。また、古い家や石畳がとてもきれいで、大切に使っているのがわかりました。研修では回数が多いと思ったけれど、研修を重ねるごとに皆と仲良くなり、教育長や鳥居先生、布田さん、小澤さんが毎回来て、僕達のためにいろいろしてくれました。ボッパルトでも、大勢の人が僕達のために手助けをしてくださいました。自分がボッパルトに無事に行って来られたのも、その他大勢の方々のおかげだと思いました。これらのことが感じられてとてもよかったです。ありがとうございました。



ボッパルト訪問を終えて

青梅市立第七中学校 3年

鈴木 美麗

今回のドイツ・ボッパルト市への訪問は、私にとっては、初めての海外旅行でした。今まで一度も飛行機に乗ったこともなく、異国の人との交流もなかった私は、訪問する日が近づくにつれ、だんだん不安になっていきました。「学校の教科書に書いてあるような英会話しか知らないし、交流なんてできるのだろうか。」「向こうの家の人には、温かく私を迎えてくれるだろうか。」「ご飯が食べられなくて困るかもしれない。」などなど。しかし、ボッパルト市に到着した時、いつの間にか不安はどこかに消えてしまい、好奇心が私の心の中にあふれ出てきました。日本では見ることのできない絵画の中の古い建造物や風景が、目の前に広がっているのです。そして一番不安に思っていたホームステイ先の家庭は、心から私をもてなしてくださり、細かいことまで、私に不便のないように心づくしをしてくださりました。私が特に嬉しかったことは、私専用の部屋を用意してくださり、タンスまで私が自由に使えるように空けておいてくださったことです。また、日本人はドイツ人が普段口にするガス入りの水が苦手だということを知っていたか、机の上に果物と一緒にガス抜きのお水を置いてくださっていました。そういったひとつひとつの心配りが大変嬉しく、私の異国での生活を全く困ることのない、楽しいドイツ訪問にしてくれたのだと思います。

ドイツで生活していて驚いたことがあります。それは、じゃが芋の食べ方です。私は本でしか知らなかったのですが、私のホームステイをした家族は、皆フォークの裏側を使ってじゃが芋をつぶしていました。私も挑戦したところ、なかなかおいしかったです。

また、もう1つ印象に残っていることは、カントギムナジウム校を訪問した時のことで

す。同年代の子と接していると、自分達とどのように人柄が違うのか良く分かりました。日本人は、グループで固まって話をする人が多いと思いますが、ドイツ人は男女の壁もなく、ひとりひとりが積極的にいろいろな子と話をするのです。そして、「自分で考える」ことをし、積極的に意見し学ぼうとする姿勢が感じられました。そんな人達と話をしていたせいか、帰国してから「積極的になった」と言われる程、私の性格も変わったようです。「ドイツの子達に負けられないな」と新たな気持ちが芽生えた良い経験になったと思います。

ドイツに訪問してから何日か経ちましたが、この訪問で与えられた世界観、経験は強く胸に焼き付き、一生の糧となっています。帰国時の飛行機の中から「もう一度、絶対世界に出るんだ」という強い志は今も変わっていません。この経験がどのような形で自分の将来に結びついていくか、自分でも楽しみです。このようなすばらしい経験をさせてくださり、陰で労してくださった方々に、厚く感謝の気持ちを抱いています。これからも末長く、ボッパルトの心優しい人達と、良い友好関係を築いていきたいです。



ボッパルト訪問を終えて

青梅市立吹上中学校 3年

佐藤 裕樹

私が感じたボッパルト市の第1印象は「静かな町」でした。人も多く、車も走っているのになぜか騒がしくなく、とても暮らしやすい、そんな感じがどこか青梅市に似ている町でした。

私がドイツに行き感じたことは、ごみに対する考え方の違いでした。ドイツではごみ減量に対する意識が高く、家庭からのごみは1ヶ月にサッカーボール1つ分程しか出ないそうです。私は最初、なぜそんなにもごみの量が少ないのか気になりました。けれども、ドイツに滞在している内に自然とその理由が分かってきました。

たとえば、ペットボトルなどは、あらかじめ25セント高く売られています。なぜなら、ドイツではペットボトルを回収する際に、25セント還元される仕組みになっているからです。それだけではなく、スーパーマーケットなどの商店では、レジ袋を置いてすらいません。

このように、ドイツではごみ減量のためのシステムができていると感じました。一方、日本ではどうでしょうか。もちろん再利用などのための仕組みはありますが、ドイツ程徹底してはいないと思います。このようなことが、今、問題視されている地球環境の改善にもつながっていると感じました。

この派遣で私が一番印象に残ったことは、ドイツの人々の優しさでした。私は、今回が初めてのホームステイでした。大きな期待と共に不安もあったのですが、ホストファミリーの方々は、私を本当の家族のように迎えてくださいました。そのため、私がそれまで抱いていた不安も消えました。ホストファミリーの方は、私のつたない英語でも理解してくださり、とても楽しく充実した1週間を送る

ことができました。

そんな中で、私は気付いたことがありました。それは、私がいまだに文法などを気にせず喋っている時でも、きちんと意思疎通ができていたことです。お互いに理解しようと努力すれば理解し合えるということが分かったと共に、たとえ言葉が通じていても、理解し合おうとしなければ、決して相手の本当の気持ちは理解できないと感じました。このことは、最近多くみられる、コミュニケーション不足にも深く関わっていると思います。面と向かって相手に意思を伝えずに、メールなどを使い伝える、そのような関係を続けている内に、ささいな誤解から大きなトラブルにつながるというようなことも、理解しようとしないう会話の原因になっている気がします。

今回の派遣で、私はさまざまなことを学びました。そのひとつひとつが未来につなげていかなければならないことです。そのようなことを少しでも多く、皆さんに還元できるように努力していきたいと思います。



Guten Tag!

青梅市立新町中学校 3年
船木 和

この夏、私は使節団の一員としてのボッパルトへの派遣で、初めての海外渡航を経験することができました。8月17日が近づくにつれて、いよいよボッパルトへ行くのだという期待が高まる一方、自分の英語は通じるのだろうかという不安も次第に大きくなりました。

そんな私が、ボッパルトでの経験を通して学んだことが2つあります。

1つは、日本との文化や環境、考え方の違いです。まず驚いたのが、建築物の大きさです。日本の大きな建物と比べても、数倍は大きい教会や大聖堂などを見学し、その壮大さに憧れを抱きました。さらに驚いたのは、ライン川にごみがひとつも落ちていないことです。なぜなら、街のあちこちにごみ箱が設置されていたり、各家庭で細かく分別が行われていたり、市民1人1人の環境に対する意識がとても高いからです。平気でポイ捨てをする日本人は、ボッパルト市民と同様の意識を持ち、環境に興味を持つことが必要だと思いました。

もう1つは、自分の意見を伝えることの大切さです。初めてホストファミリーと会った時、私はできるだけ文を話そうとしていました。しかし、向こうの人はとても積極的で、「どうして」「どうやって」と、たくさん質問をしてくれたので、私は会話に夢中になり、気がつくと、ジェスチャーを交えて単語で話していました。思い返せば、よく話ができたとするほど、単語をつないだだけの会話でしたが、相手に伝わった時の喜びは、とても大きかったです。自分の意見を伝えるのに必要なのは、完璧な文法ではなく、積極的に相手と話そうとする姿勢なのだと、肌で感じました。

1週間という短い短い時間の中で、私はさまざまなことを感じました。ボッパルトの街や自然に触れ、その雰囲気を感じ、また、それにより今後の日本の課題や、良いところを再確認できました。そして何よりも、ボッパルトの人々とたくさん交流し、コミュニケーションがとれたこと、友好を深めることに携われたことが、最高の経験になりました。行く前はあんなに大きかった不安は、いつの間にか消えていました。夏の1週間はあっという間に過ぎ去り、1週間が1日のように感じられました。私は、今回の経験を生かし、これからも青梅とボッパルトの友好を深めていきたいと思います。そして、いつかもう一度、ボッパルトの地を訪れてみたいです。

最後に、今回、この貴重な体験をさせていただいた、竹内市長をはじめ、団長の畑中教育長、引率の鳥居先生、布田さん、小澤さん、青梅・ボッパルト友好協会の皆様、そして使節団の皆さん、本当にありがとうございました。



ボッパルトで過ごした1週間

青梅市立泉中学校3年

鈴木 優麻

私は初め、ボッパルトという見知らぬ土地で1週間も過ごせるかとても不安でした。けれど、そんな不安を打ち消すかのように、ホストファミリーの方々が温かく迎えてくださり、ボッパルトで過ごす楽しみが一気に増えました。

ボッパルトは自然豊かなとてもきれいな街で、雰囲気はどこか青梅と似ていて過ごしやすく、散歩するだけでも十分楽しめる場所でした。環境に気を配っていて、買い物をする時は、ビニール袋はないためエコバッグを必ず持参しなくてはならないということや、スーパーにはペットボトルなどを入れるとお金が返ってくるというリサイクル式の機械までありました。それほど環境に気をつけているからこそ、ボッパルトは誰もが住み心地が良いと思えるきれいな街であり続けられるのだろうと思いました。

ボッパルトに住む人々は、誰もがフレンドリーで見ているとても微笑ましく、日本人が見習わなければならないところだと思いました。ボッパルトで食べた料理はとてもおいしく、好き嫌いの多い私でもたくさん食べることができました。ドイツでは、日本とは違って、夕食より昼食の方が豪華で、ポテトや肉がメインの料理が多かったです。他にもパンがとてもおいしく、チーズやハムなどを挟んで食べたりしました。今ではドイツのパンがとても恋しいです。

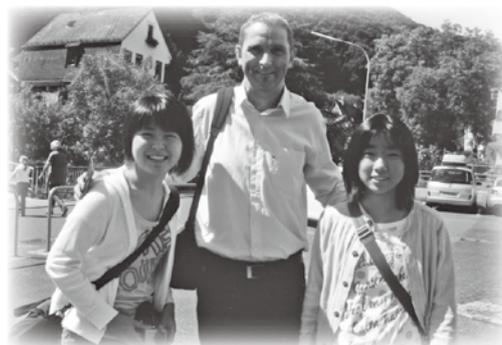
ライン川は常にいろんな船が行き来しており、観光客などで賑わっていて、この人達はきっとボッパルトの魅力に惹かれてこの地を訪れたのだろうと思いました。ボッパルトは訪れる者全てを魅了する力を持っていて、将来ここに住みたいと思ってしまうほど本当に素晴らしい街なので、1人でも多くの人にボ

ッパルトのことを知ってもらいたいと思いました。

ボッパルトでの生活は毎日がとても楽しく、日が増すごとに、このまま日本に帰らずボッパルトに残りたいという気持ちが高まりました。しかし、そんな思いも虚しく、1週間という長いようで短い時間はあっという間に過ぎ、思い出深い日々は幕を閉じました。

今回ボッパルトを訪れ、滞在したことで、世界観が広がり、今までとは違う物事の見方や考え方ができるようになったり、食も広がって、今まで食べられなかったものも食べられるようになりました。私は今まで、狭い物事の見方や考え方しかできなくて、ボッパルトに行かなければ人生の大半は損していたと思います。ボッパルトに行くことができ本当に良かったです。

ボッパルトでの出来事は一生の思い出となって、私の心の中にいつまでも残り続けると思います。そして、またいつの日かボッパルトを訪れて、今回体験した貴重な出来事を思い返し、新しい思い出を作って日本に帰って来たいです。



変化

玉川学園高等部 12年

成宮 慶有

私は「第13回青少年友好親善使節団」のリーダーとしてドイツのボッパルト市を訪問することができて、さまざまなものを見て、多くの人と出会い、たくさんのことを教えていただきました。ボッパルトで学んだことは、私のものに対する考え方を「変化」させました。ボッパルトでの経験は、私のこれからの人生においてとても役に立つ大きな経験だったと思います。私がこのすばらしい経験をできたのは、多くの人々のおかげだと思います。今回のプログラムに関わってくださったすべての人に感謝しています。

私の旅を振り返ると、毎日が楽しく、いろいろなことがありました。約1週間の旅でしたが、とても短く感じました。

私がまず印象に残っているのが、日本で受けたシュカト先生のドイツ語講座でした。この講座で、ドイツ語であいさつ、自己紹介ができるようになりました。またシュカト先生に、ドイツの国のことやドイツ学校・教育制度についても教えていただきました。この講座で、初めて出会うドイツの人への不安が楽しみに変わりました。また、私の夢が学校の教師になりたいということもあり、ドイツの教育へ関心を持つようになりました。

次に、私はドイツに着いた時のことを鮮明に覚えています。8月の日本は毎日がとても暑かったので、半袖のTシャツと短パンを着ていたのですが、ドイツは雨のせいもあり、とても寒かったです。空港からバスで乗ってボッパルトへ向かう時、街並みを見て、日本とはまた違った古いヨーロッパの雰囲気を感じ、改めてドイツに来たんだなあと思いました。ライン川沿いをバスが走り始めた時、空港まで迎えに来てくれたエファさんが私の隣の席に来て、ライン川沿いに見えるネコ城やマウ

ス城を教えてくださいました。私は不得意な英語ですが、彼女と話せてよかったです。また、私が感じたのは、ドイツの教育がとても良質であるということです。私が出会った人々のほとんどが、英語を話すことができるということです。教育者となるために、ドイツの教育は私にとって大きな研究材料になると思います。

私がドイツにいる間お世話になったのは、シュナイダー家です。とても音楽が好きな人達で、毎日が楽しい生活でした。シュナイダー夫妻の娘のステファニーはビオラやピアノが弾けて、お父さんのクラウスさんもギターが弾けて、ビオラが弾ける私にとって大きなコミュニケーションとなりました。ボッパルトの教会で、ドイツの人々と一緒に演奏させていただいたことが一番印象に残っています。

帰ってきてから、私の考え方はいろいろ変わりました。一番感じたことは、人生という道は日本だけではなく海外にもあるということです。

今回の旅はきっかけになったと思います。これからもボッパルトと関わりあいたいです。



変わらないもの

桐朋女子高等学校 2年

吉田 茉由

ポッパルトは、青梅とは一見まるで共通点がないようでありながら、似通った「あるもの」を持つ町でした。

雄大なライン川、その脇に切り立った溪谷、町のいたるところに点在する古代遺跡。初めて煉瓦の道に下り立った時は、ダイナミックな景観に圧倒され、ただ瞬きを繰り返すことしかできませんでした。街路を歩いてみても、空き缶や煙草の吸い殻は全く見当たらず、澄んだ空気には常に何処からか音楽が流れていました。何となく家々を見上げてみても、庭や窓辺には花が溢れ、築100年以上のものがほとんどでした。本当に、この町の人々は自分の町に愛着があって、大切にしているのだなど、滞在中は幾度も思わされましたし、それに対して、自分はどのように町と接しているのだろうか、ごみを道に捨てたりはしないものの、日々の生活の中で果たして大切にできているのだろうか、毎夜寝るときに思い起こしてみても首を捻っていました。

向こうで友達になったポッパルトの女の子は、一度青梅に来たことがありました。その子が「青梅はポッパルトと似ているよね。」と言った時、私は耳を疑いました。どうして似ているなんて言えるのだろうと。片言の英語で何故かと聞いてみると一言、「なんとなく。」と返されました。旅の半分が過ぎるまで、私は彼女の言ったことが理解できませんでした。ポッパルトの町に慣れてゆくうちに、ああそうだったのかと納得させられました。確かに、この町と青梅ではあらゆる点で違っているけれど、ただ、ふと遠くの葡萄畑を眺めている時、風に揺れる木の葉の重なりを見上げる時、感じた空気は住み慣れた故郷のものであったのです。それは思い込みから来る感覚に過ぎないのかもしれない。しかし、彼

女がそう感じたように、私がそう感じたように、互いの町に流れる共通した空気があって、行く人も来る人もそれを感じているのなら、長い間絶えることなく二つの町が交流を続けられている、見えない理由になり得るのではないかと思います。そのことを、私は彼女に伝えたかったのですが、英語のレベルが及ばず、上手く意思を疎通させることができませんでした。もっときちんと英語を勉強しておけばよかったと、この時ほど痛感し、悔んだことはありませんでした。青梅に帰ってきて町を見回してみると、確かにポッパルトとは違いました。私も普段の生活に戻るにつれ、町に対する意識も薄くなっていきましたが、道に転がるごみにはよく目がいくようになりました。それを拾い上げることは、今回ポッパルトに行かなければできなかつたと思います。

ポッパルトと青梅に共通する「あるもの」とは、自分の住む社会への信頼感と、時代や周囲の変化に応じることのできる不変の自信が自然と町に息づいている点。それらが人々を安心させ、惹き寄せるのだと思います。



ポッパルトを訪問して

錦城高等学校 1年

落合 郁実

ドイツへ旅立つ前、ドイツ人の友人に「ドイツは良いところがたくさんあって、人も優しいから楽しんでおいで。」と言われ、期待に胸を膨らませ、使節団に参加しました。

ドイツで過ごした1週間は、ポッパルト市内の散策、ケルン大聖堂やマルクスブルグ城、ローレイの見学など、美しくそして落ち着いた風景の中で、とても充実したものでした。

その中でも、カントギムナジウムの訪問には大きな印象を受けました。

カントギムナジウムは、日本でいう中高一貫校のような学校です。そこに私はホストファミリーのエファに連れて行ってもらいました。学校に入ってみると、そこはまるで「ハイスクールミュージカル」のような、外国の活気あふれる自由なスクールライフがありました。当たり前ですが、周りはドイツ人だけで、日本が通じない心細さと「ドイツ人と仲良くなりたい」という思いで、とても緊張していました。実際に授業に参加でき、日本でたくさん練習したドイツ語で自己紹介をしました。すると、むこうもひとりひとり日本語で自己紹介をしてくれて、感激しました。授業を受けて驚いたことは、生徒たち自身が積極的に意見交換をしながら、授業を進めていることです。日本の授業ではあまり見られない風景で、とても衝撃を受けました。

ポッパルトの訪問でやはり一番心に残っているのは、民泊家庭で過ごした日々です。

私はホームステイというものが初めてで、ドイツ語もあやふやで、知らない土地で生活できるのかとても心配でした。しかし、民泊家庭先のミュントニッヒ家の皆さんは、そんな私を笑顔で迎えてくれ、すぐに不安はどこかへ飛んでいきました。ドイツの炭酸水が飲めない私のためにミネラルウォーターを買っ

てくれたり、フリータイムの日には「お城に行ってみよう」という私のわがままに答えてくれ、世界遺産のエルトツ城に連れて行ってくれました。エルトツ城は12世紀から一度も陥落したことがなく、タイムスリップしたような気持ちになりました。エファとは一緒にテニスをしたり、ロース家でホームパーティーをしたり、折り紙をやったり公園を散歩してお互いのことを話したり…。言葉が通じないことも多々ありましたが、同じ時間を過ごすだけで言葉の壁は乗り越えることができると実感しました。それと同時に、もっと喋りたい！と思うようにもなりました。

初めて訪れる土地でありながら、安心して貴重な体験ができたのは、ミュントニッヒ家の皆さんをはじめ、多くの方の支えのおかげであり、とても感謝しています。今ではドイツに訪れる前よりもドイツに興味を持ち、青梅・ポッパルト友好協会にも入会しました。これからもより一層ドイツ語を学び、再びドイツに訪れたいと思います。そして、この旅で得たさまざまな貴重な体験を今後の生活に役立てると共に、今回お世話になった方々に恩返しがしたいです。



ドイツで学んだこと

都立青梅総合高等学校 2年

齋藤 彩音

私はこの夏、青梅市青少年友好親善使節団の一員としてドイツのポッパルト市を訪れる機会を頂きました。

私には、幼い頃から持ち続けている夢があります。それは、「世界中に友達をつくること」です。そんな夢を持ったきっかけは、海外で暮らす親戚や父の仕事場で外国人の人を見たり話をするうち、国や文化の違いに興味を持ったことだと思います。しかし、憧れだけでとどまり、母が英語を教えようとする、「日本に住んでいるのに何で英語を勉強しなくちゃならないの。」と反発し、夢は少しずつ遠ざかってしまっていました。

そんなとき私は、高校に貼ってあった使節団の募集を見ました。私は、自分を試して、夢に少しでも近づくまたとないチャンスだと思い、応募しました。

実際、ドイツに行ってから驚きの連続でした。まず驚いたのは、建物に歴史を感じさせる古いものがたくさんあることです。世代を超え、あちこち修復しながら家や建物を大切にしているドイツの人々に、温かいものを感じました。

カントギムナジウム訪問では、同世代の学生であるにも関わらず、国の違いでここまで違うのかと驚きました。授業は、日本は受け身であるのに比べ、ドイツでは自分の考えを持つ学生たちが活発に発言していました。そして、日本でよく見受けられるグループも、ドイツでは、仲良しの人以外にも友達のように話をしており、さまざまな人と日常的に話せて楽しそうだと感じました。そして、ドイツの学生の英語力と発表の時の質問の多さは、明らかに日本とは違う点でした。私も見習わなくてはならないと再確認しました。

そして、ザイザー家の方にホームステイさ

せていただいたことは、一番深く心に残っています。互いに言葉が通じない中、はじめは戸惑い、不安になりましたが、パソコンや絵、身振り手振りを使い会話することで、言葉の大切さと話すことの楽しさを知りました。それと同時に、言葉を学ぶことの意味を身にしみて感じ、「次に行く時は言葉をたくさん学んで力をつけ、今回伝えきれなかったことや話したいことを話すことができるようになる」という目標ができました。別れの時は、ザイザー家の優しい思い出が温かくて、涙が止まりませんでした。

今回の旅で一番実感したこと。それは「自分の目で見ないと分からないことがたくさんある」ということです。今回行ってみなければ、イメージだけで触れることのなかった世界で終わってしまっていました。そして、私は広いこの世界の1人だという当たり前で忘れてしまうこと。行動力の大切さ。人の温かさ。今回の旅は私に大切なことを数えきれないほど教えてくれました。



ポッパルトを訪問して

引率

青梅市立第三中学校主任教諭

鳥居 智子

青少年友好親善使節団全員が元気に訪問を終え、たくさんの収穫を得て帰国しましたことを御報告いたします。諸関係の皆様にご感謝の気持ちでいっぱいです。ポッパルトの皆様のご熱意にも驚きました。たくさんの方が協力、準備してくださって、この訪問が実現していることを感じました。ありがとうございました。

生徒たちにとっては新しい体験の連続でした。「英語をもっと勉強する！！」という発言が、初日に早くも聞かれました。語学の必要性を生徒たちは切実に感じたようです。歓迎会で全員がドイツ語で自己紹介をしました。ホームステイの家族に、家庭での生徒の様子を質問すると、楽器を演奏したり、英語で話をして意思を伝えているようでした。涙を流して家族をお別れしていた生徒を見て、生徒のみなさんのフレッシュな心に、今回の8日間の体験は大変貴重なものになったのだと思いました。今後の生き方に大きな影響を与えられると思われま

す。交流会では、歌や「よさこいソーラン節」の踊りを披露し、好評でした。アンコールではドイツの生徒と一緒に踊りました。カントギムナジウムでは、ドイツの生徒から「部活動で時間をとられ、家族との時間はあるのですか？」「自分の趣味などを楽しまないのですか？」などの質問が出ました。給食、制服、朝礼、部活などがドイツの人々には驚きだったようです。質問が多くびっくりしました。高学年になると、意見を言うことを主にした授業になるそうで、納得できました。

いろいろなことを感じ考えました。飲料はビン入り炭酸水を家庭でも購入して飲んでいただきます。日本の水のありがたさを実感しました。

「ゆっくりとした時間の流れ」を感じました。夫婦、家族で過ごす時間を大切にしています。町には自動販売機がありません。住民が反対しているそうです。ライン川には橋がありません。古い城を見学するためにはかなりの坂を歩かなければなりませんでした。便利よりは環境を守ることに重点が置かれているためでしょうか？地形は広い台地にライン川が流れていてくぼんでいるということがよくわかりました。ケスタ地形、または楕状地だと帰国してから知りました。電車の騒音が問題になっているそうです。

たくさんの方にお会いして、人それぞれに、ドラマになりそうな人生があって、今を生きているのだということを感じることができた訪問でした。今回引率という機会をいただき感謝しております。ありがとうございました。



青梅市青少年友好親善使節団に参加して
引率
青梅市企画部秘書広報課
広聴・国際交流担当主査
布田 信好

私は、平成21年4月に広聴・国際交流担当に就任し、主に姉妹都市であるボッパルト市との交流事務を行っています。今回、青梅市青少年友好親善使節団の引率として同行しました。私は以前、ドイツに行ったことがありましたが、ボッパルト市へ行ったのは初めてであり、手紙や電話でやり取りをしていた方々と初めて会うことになりました。実際に会ってみると、印象どおりの友好的で親切な方ばかりであり、すぐに馴染むことができました。このことは、異国の地に来て不安だった団員たちにとっても、肩の力が抜け、安心できたのではないのでしょうか。

今回の団員たちと初めて会った時、第1印象は「おとなしいな」と思いましたが、事前研修を重ねるにつれ、協力的で積極的な思いやりのある使節団となりました。ボッパルト市のカントギムナジウムという学校で「青梅市の観光」、「私たちの学校生活」というテーマで発表するための準備や学習、また、交流会で披露する「よさこいソーラン」の練習も団員自らが進んで行き、臨時練習日まで設けて練習に励んでいました。実際、カントギムナジウムでのテーマ学習の発表会では、講堂にたくさんの生徒が集まり、皆、真剣に団員の発表に耳を傾けていました。発表が終わると、質問や意見交換が活発に行われ、活気に満ちた場となりました。団員は、日本とドイツの教育に関する考え方の違いや互いの国の教育制度の良い点、悪い点を感じ取っていました。団員たちは、分散していくつかの授業にも参加し、授業が終わると、積極的に名刺や日本土産を持って配っており、事前研修で習ったドイツ語や英語で話しかけていました。

カントギムナジウムでの交流は今回が初めてですが、同年代の青少年が実際に対面して意見交換をすることができたことは、両国を理解する上でとても良い刺激になったのではないのでしょうか。ドイツを知ると共に、改めて自国である日本を知ることになったことと思います。

ボッパルト滞在中は、観光地へも案内していただきました。歴史ある建物や教会を大切に保存しており、観光だけではなく、実際に使用している建物も多くあり、驚かされました。トリアの大聖堂では、日本語ガイドをつけていただきましたが、団員たちはその説明を熱心に聴いており、多くの質問をしてメモを取っている姿が印象的でした。観光中も多くのボッパルト市民にエスコートいただき、自由行動では、お目当てのお土産を探すため、拙いドイツ語で説明している団員を微笑ましく見ていました。

ボッパルト市と友好協会に開催していただいた懇親会では、「よさこいソーラン」を披露しました。これは団員が一生懸命練習してきたものであり、自治会から借用した法被を着ての披露となります。団員の気迫が見ている私まで緊張させます。声を張り上げ、動きも大きく、踊りは今までで最高の出来となりました。踊り終わった後の団員ひとりひとりの充実した顔が今も忘れられません。

青少年使節団の団員は、今回の経験を通じて、ドイツを知り、日本を再認識し、言葉は通じなくとも心は通じ理解しあえることを学んだのではないのでしょうか。今後、この経験を自分ひとりのものにする事なく、各学校で見聞を広めていただきたいと思います。

最後に、この青少年使節団を派遣するに当たり、多くの方々のご協力を頂きましたことに感謝申し上げます。

(2) テーマ学習

今回の青少年派遣事業では、ボツパルト市滞在中に市内にあるカントギムナジウムという学校を訪問し、青梅市の観光や学校生活について発表し、日本とドイツの教育制度の違いを学ぶことをテーマとしていました。

そこで、団員たちは、日本での事前研修において、テーマに沿って学習しまとめ、発表に備えました。

当日は、画像等を用いながら、団員それぞれがテーマに沿ってカントギムナジウムの生徒の前で発表し、その後、さまざまな質疑応答が行われ、とても活発な交流となりました。団員にとっても、大変貴重な体験となりました。

ここでは、それぞれが学んだ内容や発表での感想などを報告します。

ドイツ人の積極性

青梅市立第一中学校2年

比嘉 友浩

テーマである「私たちの学校生活」、「青梅市の観光」をドイツの人にわかりやすいように、通訳さんを通して、要点を簡単に説明しました。各自担当することを調べ、僕は、多摩川について、川の水が飲むことができる、などの説明をしました。

ギムナジウムの生徒から、たくさんの質問がありました。「学校が終わった後は、どのように過ごすのか」「休みの日は、何をしているのか」「部活動について」「塾について」「給食について」「お金のこと」などです。

ソーラン節を踊った後の反応も良く、日本文化に興味を持っていると感じました。

授業見学、テーマの質問で感じたことは、ドイツ人はとても積極的だということです。僕は、理科の授業を見学し、教室内で、皆が意見を出し合っていて、自分の意見も言い実験していました。

日本人のことは、自分のやりたいことをはっきり言わないと言っていました。

ドイツの生徒は、ほとんど塾へ行っていないので、日本人は、受験や勉強が大変だと思います。ドイツの人は仕事が、5時には終わり、家族で過ごす時間を大切にしています。夏休みは、1週間ぐらい、バカンスで、近くの国へ、家族旅行に行くそうです。日本の父親は夜も帰って来る時間は遅く、休みの日でも僕達には部活動や大会があり、あまりいっしょにいません。

国が違くと文化や学校の教育制度や考え方の違いを見て知ることができました。

青梅総合高校と姉妹校となるカントギムナジウムの人達に使節団員の口から青梅を説明でき、青梅を多く知ってもらえたことは、とても良かったと思います。

ドイツと日本の学校

青梅市立第二中学校3年
雙木 萌子

私は、今回の使節団員になるまで、ドイツも日本と同じような学校制度だと思っていました。もちろん、給食や制服はないと思っていましたが、他は同じだと思っていました。なので、小学校が4年制、ギムナジウムでは授業が午前中で終わるという話を聞いて驚きました。

まず、小学校が4年制ということは、小学校4年生で自分の進路を決めなければなりません。日本のようにそのまま中学校へ上がるということではなく、大学へ行きたければギムナジウムへ、大学へ行く必要がないと感じれば、中学校や専門学校などへ主に行くそうです。専門的な分野で力を伸ばす人も多いそうです。私は、早いうちに自分の進路を決めるというのは良いと思いました。自分の道が決まっていれば、だらだらとなんとなく勉強することなく、しっかりと勉強うちこめると思いました。私は、実際にそこを垣間見ることができました。

私たちは、ボツパルトへの訪問のときに、現地のカントギムナジウムを見学させてもらいました。授業では、誰一人つまらなそうに授業を受けている人はいませんでした。やはり、自分がすべきことをわかっているからなのだろうと思いました。

けれども、同時に日本の学校の良いところも感じました。向こうの学校では、合唱などを学年の全員、クラスの全員ですということは少ないと聞きました。なので、何かを協力して物事をするというのは日本の学生の良いところなのではないかと思いました。

ドイツの学校と日本の学校にはたくさんの違いがありました。どちらにも良いところがありました。そんな学校同士、生徒同士の交流が深まれば、もっと良くなるのではないかと思いました。

ドイツの教育を実際に見て

青梅市立第三中学校3年
浅野 光

私は今回の旅でカントギムナジウムに行き、ドイツの教育制度を学ぶことができました。ドイツの教育制度は日本のものとはだいぶ違っていました。

カントギムナジウムには10歳から19歳までの生徒が通っていました。そこで約9年間の授業を受けるそうです。日本は同じ9年間でも小学校と中学校に分かれているのでカントギムナジウムは小学校と中学校が一緒になった学校のように魅力的だと思いました。

カントギムナジウムに行くとドイツと日本では学校での過ごし方も違うことに気付きました。

行ってまず面白いと思ったことは服装の違いでした。日本の中学生や高校生などが着ている制服はなく、私服で授業を受けているということは聞いていましたが、実際に見てみるとやはり少し驚きました。それと同時に生徒ひとりひとりの個性が感じられ、とても良いと思いました。

制服だけでなく、給食もありませんでした。自分の好きな食べ物や飲み物を持ってきていいので、まるで日本の高校のようでした。

そして何より私が驚いたことは、授業の雰囲気の違いでした。私は、カントギムナジウムで数学の授業を見せてもらうことができたのですが、その教室の先生が急に、「僕はダンスが好きだから教えてほしい。」と言い出し、授業の前に披露したソーラン節を教えることになりました。真面目よりも楽しさを強く感じた授業でした。

カントギムナジウムに行くと見学をすると、普段私が日本の学校であたり前だと思っていたことの多くが違っていたので驚きました。国によってこんなにも違いがあるのかと思い、興味が湧いてきたので、他の国の教育制度や学校での過ごし方も知りたくなりました。

ドイツの学校、日本の学校

青梅市立西中学校3年

田中 歩

ボッパルトの学校カントギムナジウム。そこで私は、日本とは異なったドイツの学校や教育制度を実際に見聞き、感じてきました。

事前に、ドイツでは日本よりも早い段階で進路が分かると学習しました。個人の特性や就きたい職業に合わせて、大学進学を目指したり、職業訓練をするなどを選択するそうです。将来に直接関わってくるような進路を早い時期に決めるこの制度は、自分の将来をしっかりと見据えることにもつながり、とても良いと思いました。

カントギムナジウムは、学習に積極的に取り組んでいて楽しい雰囲気为学校でした。授業のための道具や設備が充実していて、羨ましかったです。新しいものを進んで取り入れているそうで、その中でも、最近導入したというスピーカー付きホワイトボードには驚きました。

通っている生徒さん達は、授業中も休み時間もはつらつとしていました。同じような目標を持った友達と一緒に過ごせるのも、良いところだと思いました。

今回私は、日本の学校がドイツに誇れる点も見つけました。例えば、合唱。クラスや学年で協力して作り上げる合唱をドイツの方にも聴いてもらいたいです。他にも、盛んな部活動や真っ直ぐな整列の様子なども、日本の学校が誇りに思える点です。そういったことを今回、カントギムナジウムの生徒に伝えられなかったのが、少し残念です。

今後も青梅とボッパルトが交流を重ね、お互いの国の学校や教育制度についても深く話し合えるようになってほしいです。

ドイツの教育制度について

青梅市立第六中学校2年

川鍋 宏明

ドイツの教育は日本と同じで6歳から始まり、その修業年限も9年間です。しかし日本と決定的に異なる部分があります。それは、早い時期に学校がわかれるということです。ドイツでははじめに4年間の基礎教育が行われ、主に計算やドイツ語の勉強をします。5年生になると職業専門学校へ進学するためのハウプトシューレ（5年間）と、レアールシューレ（6年間）、大学へ進学するためのギムナジウム（9年間）という3つの学校にわかれます。この判断は大変重要なものになります。

ハウプトシューレ、レアールシューレは職業教育の基礎固めとなる学校で、卒業すると職業学校に進学します。ドイツの職業学校は学校に通いながら、職人や社会の下で訓練を受けます。つまり、二元職業教育制度が特徴ということです。さらに、レアールシューレは卒業後に中級卒業の資格を取得し、特殊な職業学校か専門の上級学校を経て、企業の管理事務職、商売サービス産業の仕事につきます。

ギムナジウムは大学進学の通過点と考えられているため、語学や理科、社会などの教科があり、特に歴史、政治についてや自然科学についての教育に力を入れています。ともに自分で調べる勉強方法を取り入れ、自分の意見を表現できる討論能力を重視しています。実際、ギムナジウムで青梅の紹介をした時、どんだん気になったことを質問して自分の知識として取り入れようとしていました。

またハウプトシューレでは英語、レアールシューレでは英語とフランス語、ギムナジウムでは英語、フランス語、スペイン語、ラテン語を習い、ラテン語以外は、早い段階でその言語だけで授業が行われます。そのため、ほぼすべての人は学校を卒業するまでに、他の言語で自分の考えを話せるようになります。

ドイツと日本の教育制度の違い

青梅市立第七中学校3年
鈴木 美麗

私は今回、ドイツのカントギムナジウムで「青梅市、日本の学校」について発表をしました。中でも私は、学校制度について詳しく調べました。同じ青梅市の中中学校の中でも、制服をはじめ、さまざまな学校の特色があることを知りました。しかし、基本的な部分は同じで、小・中・高校とも、時間や学習制度は同じでした。しかし、ドイツの学校は、日本の学校とはたくさん部分が異なっていました。まず、日本でいう小学、中学、高校、大学との違いです。ドイツでは、小学校4年生までは皆一貫して授業を受けますが、5年生からは進路別の学校に分かれます。学校は3つに分かれており、「基礎学校」「実技学校」、「ギムナジウム」のどれかを選択します。しかし、どれも日本のように入学試験というものがないので、小学校での成績が重視されます。中でも、「ギムナジウム」は他の2つの学校より通学する期間が4年多く、小学校の学力が評価されないと入れない学校です。ギムナジウムに進学できる生徒は平均で20%ということから、私たちが訪問した学校は、学力の進んだ学校であったことが分かりました。ドイツの教育制度は、簡単に言うと能力と進路重視のシステムです。私が今回これらのドイツの学校制度を調べ一番に驚いた部分は、小学校の時点で自分の進路を決めていなければならないということです。日本では、高校に入ってまだはっきりとした将来の夢が決まっていないという人もいます。しかし、早い時期に将来のことを意識することで、実現力が上がるように思います。また、「入試がない」という制度も、勉強を普段からコンスタントに行うことができる、良い制度だと思います。

日本人は、ドイツとは異なった制度ですが、どちらにしても、本人が学びたいならば、学習できる、良い教育制度だと感じました。

私達の学校と、ドイツの学校

青梅市立吹上中学校3年
佐藤 裕樹

私は、ドイツに行った時の、カントギムナジウム訪問で、「私達の学校生活」というテーマについて発表しました。ドイツには、制服や給食のようなものがないので、とても関心を示しているようでした。

その後、私たちは、カントギムナジウムの生徒と一緒に授業を受けました。私は、私の1つ上の学年の人達と一緒に、数学の授業を受けました。その時私が感じた日本の学校との違いは、生徒が授業に積極的であるということです。日本では、授業を受ける態度こそまじめで静かだと思います。けれども、自分から進んで発言、質問をするというのは苦手だと思います。

積極性は、私達がこれから生きていく上でも、また、自分自身を成長させていく上でも、とても重要な役割を果たしていきます。

ですから、私達は、ドイツの学校の優れた特色を学び、これからの学校生活に生かしていかなければならないと強く感じました。

また、ドイツの方々も、日本のことを紹介した時に、とても興味を示してくださいました。だから、私達は、ドイツの方々にも、もっと日本を理解してもらえるような活動も行っていきたいと思いました。

「学校」という私にとって非常に身近なテーマでも日本とドイツでは異なる点も多く、そのひとつひとつをお互いが理解し、学べることは学び、改善していくことが、私達の成長のために必要なことだと感じました。

日本の教育は、義務教育の小学校に6年間、同じく中学校に3年間通い、その後、自分の希望する進路に合わせて高等学校に3年間、大学に4年間通うという6・3・3・4制を基本として成り立っています。しかし、ドイツの場合は、小学校に4年間通った後、就職や進学を希望する生徒ごとに学校が分かれます。

私たちは、ポツパルトへの派遣中、進学を希望する生徒が通う、カントギムナジウムを訪問し、高校生の授業を体験させていただきました。そこでの授業は、日本の授業のように、講義を聞いてノートを取るのとは違い、先生が生徒に質問を投げかけ、生徒もまた積極的に手を挙げて答えるというものでした。生徒同士で意見が飛び交い、授業が進んでいく様子がとても印象的でした。しかも、先生が説明を始めると、それまでの活発さが集中力に変わり、教室が一気に静かになりました。メリハリがついていて、理想的な授業だと感じました。

このような授業が行われている背景には、学校制度が関係していると思います。日本では、中学校までは学区内の学校に通うのが一般的です。しかし、ドイツでは日本の小学校5年生の段階で、すでに進路に合わせた学校に通うので、同じ目標を持った生徒同士が集まることができます。私は、この点がドイツの教育の一番のメリットだと思います。

国によって学校制度が異なり、学校制度によって教育スタイルも異なります。ドイツの学校制度を学ぶことで、日本との違いをたくさん知ることができ、また、日本の教育の良さも学ぶことができました。これからは、それらのことを踏まえた上で、充実した学校生活を送っていきたいと思います。

ドイツと日本の教育制度は全く違い、日本の教育制度は文部科学省によって定められていますが、ドイツでは州によって異なります。そして、日本と根本的に違うところは、小学校が4年制で、10歳で進路が決まるということです。

日本では、6年間の小学校教育を受けて中学校に入学し、中学校は3年間で卒業します。義務教育終了後は大抵の人が高校に進学し、3年間勉強した後、大学へ行くか就職するかそれぞれが自分の進路を決めます。しかし、ドイツでは小学校を卒業する10歳で自分の進路を決めなくてはなりません。大学へ行くためにはギムナジウムで9年間学ぶことになり、それ以外の人には5年制の中学校へ行って義務教育を受けるか、専門技術も学ぶ6年制の中等実科・商科学校へ行くことになります。これらの進路は、基本的には小学校での成績によって決まり、ギムナジウムへは一定の学力がなければ行けません。ギムナジウムではよりハイレベルな一般教養と最低でも2つの外国語を学び、5年制の中学校と実業中等学校では英語が必修科目となり、それぞれが職業に応じた一般教養を学びます。授業時間も日本とは異なり、ドイツの小学校やギムナジウムでは午前中に授業は終わります。日本では塾や習い事、部活動などがありますがドイツにはなく、家族と過ごす時間がたくさんあります。そういったことから、ドイツの人々はフレンドリーで誰とでも仲良く接することができるのだと思います。

私は今まで触れたことのなかったドイツと日本の教育制度の違いについて学び、国によってそれぞれ違うことでお互いが高め合い、これからの世界を担っていくのではないかと思います。そして、教育制度の違いをより多くの人に学んでもらえたら良いと思います。

私は今回のドイツへの訪問する「第13回青少年友好親善使節団」に選ばれなければ、ドイツの教育制度について自分自身の目で見ることにはできなかつたと思います。今回は多くの人々のおかげでポツパルトを訪問することができ、とても感謝しています。

私の夢は学校の教師になることです。そのため、ドイツの教育制度にはとても興味がありました。しかし、私はこの目でカントギムナジウムの学校の授業を見るまでは、日本の学校教育は世界の中でもとても良質な教育だと思い、ドイツの教育は劣っているものだと思っていました。それは間違いでした。私が思うドイツの教育制度の特徴は、4年間の初等教育の後、日本の専門学校のような、将来は技術的な職業に就職するための学校と、日本の高等学校に似たギムナジウムという進学校に分かれます。私がポツパルトで訪問したのは、後者の方のギムナジウムです。私がポツパルトへ行くためのドイツ語会話で講師をしてくださったシュカト先生から、専門学校からギムナジウムへ移ることやその逆も可能であることを教えていただきました。この制度は日本と違い、興味深いと思いました。

私がドイツの教育がとてもすごいと感じたのは、ほとんどの人が英語を話せることです。ドイツでの英語教育は話すことが主体だからだと思います。ドイツの学校は午後1時までしか授業がありません。また塾に行っている人もいません。授業をする先生も自由に行っていて、生徒ものびのびと勉強しています。

私が教師になった時に良い教育をするためにも、ドイツの教育は大きな教科書になると思います。

ドイツの学校に教壇はありませんでした。すべての学校がそうなのかは分かりませんが、少なくとも今回訪れたカント・ギムナジウムの教室にはありませんでした。日本の学校にはほとんどの教室に教壇があって、教師はその上に立って生徒に勉強を教えますが、ドイツの授業は教壇を必要としないスタイルが確立されています。もちろんドイツでも教師と生徒の区別はありますが、どちらが目上、目下という概念はありません。教師は講義をする中で、授業内容について頻繁に生徒に意見を求めます。生徒も間違えるのを恐れて黙りこむということは全くなく、常に積極的に挙手をして発言し、他の生徒との意見交換、指摘のし合いをしていました。授業は当たり前ですがドイツ語で行われていましたので、何を聞いてもちんぷんかんぷんでしたが、日本の教室との空気の違い、根本的な授業形態の違いは、痛いほど感じ取ることができました。日本では、つい最近まで、自ら積極的に意見を主張することは、遠慮がなくあまりよくないという考え方があったせいか、教師が講義をする間、生徒はひたすら聞くに徹し、ノートを取るという授業風景が今でも一般的といえるでしょう。しかし現代では、いかにして自分の意見を論理的に主張できるか、異なる文化をもつ人々と交流するための発信力が大切になってきています。ドイツの教室では、生徒ひとりひとりが「自分」を持ち、発信する訓練ができるような環境が、当然のようにそこにありました。対して、現代の多くの日本の教室には、まだその環境が整っているとは言い難く、ドイツから帰ってきて、普段通り自分の席につき授業を受けたとき、私は日本の教室に古くから残る一種の閉鎖性を見出さざるを得ませんでした。国際化の進む今日、教師も生徒も、一度今の教室を出て、新しい教室へ足を踏み入れる必要があるのではないかと思います。

日独学校生活の違いについて

錦城高等学校 1年
落合 郁実

私は「私たちの学校生活」というテーマで、カントギムナジウムで発表しました。

部活・給食・朝礼・制服・授業などに分け、学校での写真を持ち寄り、発表内容を作り上げていきました。発表時はドイツ語で通訳の方に読んでもらうので、一文を短く簡潔にまとめることが難しかったです。

私は「部活動」について発表しました。ドイツには部活動という制度がなく、学校が終わった後で個人的にスポーツクラブや文化活動をするので、学校で行う日本の部活動にとってもびっくりしていました。放課後や休日に家族や友達と過ごす時間を大切にするドイツ人にとって、休みの日に部活動があることを不思議に思ったそうです。また、制服や給食の制度もドイツにはなく、服装も自由で、休み時間には家から持ってきた果物などを食べていました。

私は実際に学校に行ってみて、ドイツの生徒は日本よりも自由な学校生活を送っているような印象を受けました。そして発表への質問も多く、何に対してもとても積極的・意欲的に取り組んでいることを感じました。

事前学習の準備は大変でしたが、カントギムナジウムの生徒の皆さんに、少しは青梅のこと・日本の学校のことを知ってもらうことができました。そして、私自身もドイツと日本の学校生活の違い、文化の違いを学ぶことができ、とても貴重な体験となりました。

日本とドイツの教育制度について

都立青梅総合高等学校 2年
齋藤 彩音

私たちが自分の国であたり前だと思っていることは、世界的に見るとあたり前でないということが、たくさんあります。それは教育制度についてもいえます。それぞれの国にそれぞれの教育制度があります。

日本では、小学校・中学校は義務教育です。中学校を卒業すると、就職する人と高等学校を受験し、進学する人がいます。高等学校は私立と公立とがあり、私立は授業料あり、公立は授業料なしです。そして高等学校を卒業すると就職する人と大学・専門・短大と多種多様な進路があります。小学校は6年、中学校は3年、高等学校は3年間です。

ドイツでは6歳から15歳までの9年間は義務教育で、小学校は4年間で、学校は午前中で終わり、宿題もありません。科目の中には宗教教育もあります。そして、4年生で進路を決めます。受験はありませんが、成績と家の希望によって、職業訓練をするハウプトシューレ、勉強と職業訓練をするリアルシューレ、そして今回見学させていただいた大学進学のための学校、ギムナジウムがあります。それぞれ学ぶ期間も違い、ハウプトシューレ、リアルシューレは5～10学年、ギムナジウムは5～12・13学年までです。

今回カント・ギムナジウムを訪れて感じたのは、ドイツの学生は疑問があると、すぐに手を挙げ活発に発言します。それは、日本にはない意見交換型の授業や、早くから進路を決めるため自分のことをしっかり管理する力の表れだと感じました。日本は受身型の授業で、大きくなってから将来を決めるので、日本とドイツは正反対の教育制度です。日本の大学はお金を払いますが、ドイツの大学は無料です。

このように、国によって教育制度が大きく違います。理由は、求めている能力が違うからです。教育は国の命なので、その国の特色がとてもよく表れていました。

5 参考資料

(1) 平成22年度事業スケジュール

月 日	内 容
4月 9日(金)	校長会にて市内各中学校へ派遣団員推薦依頼
4月15日(木)	広報おうめ・ホームページ等で公募団員募集開始(5月7日締切)
5月30日(日)	公募団員面接試験実施
5月下旬	市立中学校団員推薦者内定
6月 4日(金)	公募団員内定、通知発送
6月13日(日)	第1回事前研修(市長面談等)
6月18日(金)	第2回事前研修(親子研修・派遣事業説明)
7月 4日(日)	第3回事前研修(ドイツ語会話等)
7月15日(木)	臨時事前研修1(出し物の決定等)
7月25日(日)	第4回事前研修(ドイツ語会話等)
7月31日(土)	第5回事前研修(テーマ学習打ち合わせ等)
8月 6日(金)	第6回事前研修(親子研修・団員決定等)
8月11日(水)	臨時事前研修2(テーマ学習打ち合わせ、出し物の練習等)
8月17日(火)～ 8月24日(火)	ボッパルト市へ派遣
9月 3日(金)	第1回事後研修(親子研修・帰国報告等)
10月 3日(日)	第2回事後研修(報告文提出等)
2月	報告書作成

(2) 研修の様子



第1回事前研修



第3回事前研修 (シュカト先生のドイツ語講座)



第4回事前研修 (恩田先生のドイツ語講座)



第5回事前研修 (テーマ学習打ち合わせ)



第6回事前研修 (テーマ学習発表練習)

姉妹都市ボッパルト市への青少年友好親善使節団



派遣団員募集要項



今年の夏、姉妹都市ボッパルトへ！

あなたも参加してみませんか。

(第13回ボッパルト市への青少年友好親善使節団派遣事業 主催：青梅市)

- 【事業目的】 青梅市の姉妹都市ドイツ・ボッパルト市へ青少年を派遣することにより、両市の友好親善を深めるとともに、国際的視野に立つ青少年の育成を図ることを目的としています。
- 【募集対象】 青梅市在住の高校生および市立中学校在籍以外の中学生
※市立中学生は各学校での募集となります。
- 【派遣先】 ドイツ連邦共和国ボッパルト市
- 【派遣期間】 平成22年8月17日(火)から8月24日(火)までの8日間
- 【応募資格】 1 派遣時に、中学2年生から高校3年生であること(今までにこの派遣事業でボッパルトへ派遣された方は除きます。)
2 心身ともに健康で、協調性に富み、規律ある団体行動ができること
3 派遣後も民泊受入れ等で青梅市の国際交流事業や姉妹都市交流事業に協力できること
4 青梅市が実施する事前研修(ドイツ語会話等5回程度)および事後研修に参加できること(事前研修を修了した方が、正式に団員となります。)
- 【募集人員】 若干名
- 【費用】 派遣にかかる航空運賃、空港施設使用料、空港税、燃油サーチャージ、海外旅行傷害保険料、市役所・成田空港間送迎バス代は青梅市が負担します。それ以外の個人で必要な経費は団員本人の負担となります。たとえば、パスポート取得に関する費用等
- 【宿泊】 ボッパルトでの宿泊は、全員ホームステイとなります。
- 【選考】 作文審査と面接
- 【選考結果の通知】 6月8日までに応募者全員に通知します。
- 【作文】 所定の原稿用紙に1000字から1200字の作文を作成し、申込書と一緒に提出してください。
- 【作文のテーマ】 ①「国際交流あるいは、国際理解について」
②「ドイツ(ボッパルト)に行って学びたいこと」
※どちらか一つ選んで書いてください。
- 【面接日と会場】 平成22年5月30日(日)
午前9時から(予定) 各応募者ごとの面接時間は別途連絡します。
青梅市福祉センター第2研修室
- 【申込方法】 受付期間内に所定の申込書に記入の上、写真を貼付し、作文と一緒に市役所本庁舎2階秘書広報課広聴・国際交流担当窓口へ直接持参または郵送してください。(作文は自筆に限ります。)
- 【申込書・原稿用紙】 青梅市のホームページからダウンロードできます。また、市役所受付、秘書広報課広聴・国際交流担当窓口、各市民センター、中央図書館で配布します。
- 【申込受付】 平成22年4月15日(木)～平成22年5月7日(金) 必着
(ただし、土・日・祝日は休み)
午前8時30分から午後5時15分まで
- 【事前研修】 団員内定者の第1回目の研修は、6月13日(日)午前11時から青梅市役所2階市長公室で行います。

第13回青梅市青少年友好親善使節団

＜派遣の記録＞

平成23年2月発行

発行・編集 青梅市秘書広報課

青梅市東青梅1-11-1

印刷 株式会社 成和印刷